

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究(V)*

久世敏雄 宮沢秀次¹⁾ 浅野敬子²⁾
後藤宗理³⁾ 二宮克美 池田博和
伊藤義美⁴⁾

I 問題

われわれは、社会的態度を保守的態度、革新的態度、および大衆社会的態度の3側面からとらえて、中学生・高校生の社会的態度がどのように形成され、変容するかを調べるために、これまで8年間にわたる縦断的調査資料を収集し、その分析を行ってきた(久世ほか; 1974; 1975; 1977; 1978; 1979; 1980; 1981a; 1981b)。

これまでに報告したいくつかの研究では、中学生・高校生の社会的態度の変容過程について全体的傾向をみてきたが、われわれは中学・高校の6年間における社会的態度の変容について、さらに個別的分析が必要であると考えている。個別的分析とは、中学1年から高校Ⅲ年までの6年間の縦断的データについて、個々人に焦点をあて、社会的態度の変容過程を検討しようとするものである。法則定立的研究と具体的に個人がどのような態度を形成しているのかを追求する、いわば個性記述的研究とが相補うことによって、中学生・高校生の社会的態度の様相がより一層明らかになるといえよう。

個人に焦点をあてる個別的分析の予備的段階の分析は、第Ⅰ報(久世ほか; 1979)において行った。これは、社会的態度項目への反応に基づいて被調査者のグループ化を試みたものである。さらに、第Ⅱ報(久世ほか; 1980)では、中学1年時における大衆社会的態度得点に基づいてグループ化を行い、中学1年以降の学年においてそれぞれのグループがどのような社会的態度の特徴をもつ

かを明らかにした。

本報告では、中学1年から高校Ⅲ年までの6年間における被調査者の社会的態度項目への反応の変化に基づいて、被調査者のグループ化を行い、それらのグループについて社会的態度の変化の全般的特徴を明らかにする。さらに、それらのグループの数事例(数名)をとりあげ、その個人個人の社会的態度の変容過程について分析を行うことにする。

II 方法

1 社会的態度の質問紙

社会的態度の質問紙は付表1に示した。これは保守的態度、革新的態度、および大衆社会的態度を測定するために用意されたそれぞれ13項目、計39項目の質問から構成されている(表1)。質問紙は、「非常に賛成」、「賛成」、「賛成とも反対ともいえない」、「反対」、「非常に反対」という5段階評定尺度を用いている。被調査者の各項目への反応は、「非常に賛成」の場合5点、「賛成」の場合4点、「賛成とも反対ともいえない」の場合3点、「反対」の場合2点、「非常に反対」の場合1点を与えて得点化した。項目得点という場合は、この値をさし、数値が大きいほどその態度が強いことを意味する。

2 調査対象と調査時期

被調査者は、名古屋大学教育学部附属中学校および高等学校の生徒である。今回の分析に用いた調査対象は、昭和47年度に中学に入学し、昭和52年度に高校を卒業した男女生徒、昭和48年度に中学に入学し、昭和53年度に高校を卒業した男女生徒、および昭和49年度に中学に入学し、昭和54年度に高校を卒業した男女生徒の3群のうち、中学1年から高校Ⅲ年まで毎年この調査をもらえなかった男子70名、女子70名の合計140名の生徒である。

調査の実施方法はクラスごとの集団実施によった。ま

* 本研究の資料分析のための計算は、名古屋大学大型計算機センターのFACOM M-200によった。

- 1) 市邨学園大学講師
- 2) 中京女子大学家政学部講師
- 3) 名古屋市立保育短期大学講師
- 4) 名古屋大学教養部助手

表1 質問項目

項目番号	項目	項目番号	項目
1	国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい	22	政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである
2	女が政治などに口だしすべきでない	23	家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである
3	結婚は家柄を重んじなければならない	24	「方角が悪い」などということはまったく信用しない
4	伝統や習慣は尊重すべきである	25	結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい
5	世間をわたるには義理や人情が最も大切である	26	家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである
6	長男が家をつぐのは当然だ	27	流行語などはよく知っていないとはずかしい
7	親孝行は子どもの義務である	28	労働者や大学生のストライキやデモ活動などに関心がない
8	目上の人にはもっと敬語を使った方がよい	29	みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする
9	学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである	30	国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない
10	世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない	31	中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい
11	日本は天皇を中心にまとまるべきである	32	理論よりフィーリングやムードが大切である
12	デモやストでさわぐのは民主国家の恥である	33	誰が衆議員の選挙で当選しようと日本の政治はかわらないと思う
13	家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい	34	今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい
14	個人の自由は尊重すべきである	35	共同募金や歳末助け合い運動があるなるべくさけるようにする
15	正しいことであれば世間体など気にすべきでない	36	ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどうだ
16	いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごととは断った方がよい	37	いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない
17	社会のために正しいことであるなら親の反対をおし切っても行動すべきである	38	皆と同じような持物や服装をしていないとひけめを感じる
18	いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである	39	公害問題は被害者と加害者だけの問題である
19	デモやストをするのは労働者の当然の権利である		
20	先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する		
21	男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない		

（注）項目番号1～13は保守的の態度項目、14～26は革新的の態度項目、27～39は大衆社会的の態度項目である。

た、調査時期は各学年の年度末であった。

3 分析方法

分析は男女別に行った。中学1年から高校Ⅲ年までの社会的態度の変化は、1学年進んだとき、個人の各項目に対する5段階評定尺度上の反応が変化したかどうかという変化回数に基づいてとらえた。すなわち、1学年進んだとき、反応が変化した場合に1点、変化しなかった場合には0点とした。したがって、各項目について、中学1年と中学2年の間の変化得点、中学2年と中学3年の間の変化得点、以下、高校Ⅱ年と高校Ⅲ年の間の変化得点という5つの変化得点が得られる。項目別にこれ

ら5つの変化得点を合計したものを項目変化得点とよぶことにする。これは0～5点をとる。項目変化得点は、ある項目において、隣り合う学年間で、評定尺度上の反応が何回変化したのかを示すものである。また、項目ごとに算出した学年間の変化得点を39項目について合計したものを、特に学年間の変化得点とよぶことにする。これは0～39点をとる。学年間の変化得点は、ある隣り合う学年間で、39項目のうち何項目において、評定尺度上の反応が変化したのかを示すものである。

本報告では、男女ともに分析対象者を中学1年から高校Ⅲ年までの社会的態度の変化が比較的小さい安定群、その変化が比較的大きい不安定群、およびその変化が中

間的な中間群に分けて分析を行った。安定群、不安定群は、つぎのようにして構成された。まず、3つの基準を設け、それぞれの基準によって暫定的な安定群と不安定群を分け、そして最終的には、いずれの基準によっても安定群に分類された者を安定群に、同様に不安定群に分類された者を不安定群にした。中間群は、安定群にも不安定群にも入らない者から構成された。

各基準については、次のとおりである。

①個人ごとに、5段階評定尺度上で、中1と中2の間、中2と中3の間、以下、高IIと高IIIの間それぞれにおいて、項目得点の変動が0点あるいは1点である項目数を算出し、これらを合計する。この合計値を x_1 とし、男女ごとにその平均(M_1)と標準偏差(SD_1)を求め、 $x_1 \geq M_1 + \frac{1}{2}SD_1$ となる者を安定群に、 $x_1 \leq M_1 - \frac{1}{2}SD_1$ となる者を不安定群とする。これが基準1である。なお、男子では M_1 は、170.09、 SD_1 は21.32であり、女子では M_1 は、179.33、 SD_1 は12.25であった。

②まず、5段階評定尺度を3段階評定尺度に翻案する。すなわち、「非常に賛成」と「賛成」をひとつにまとめ、「非常に反対」と「反対」をひとつにまとめる。このように個人の各項目に対する反応を3段階にまとめたうえで、個人ごとに、中1と中2の間、中2と中3の間、以下、高IIと高IIIの間それぞれにおいて、項目への反応が変わらない項目数を算出し、これを合計する。この合計値を x_2 とし、男女ごとにその平均(M_2)と標準偏差(SD_2)を求め、 $x_2 \geq M_2 + \frac{1}{2}SD_2$ となる者を安定群に、 $x_2 \leq M_2 - \frac{1}{2}SD_2$ となる者を不安定群とする。これが基準2である。なお、男子では M_2 は、123.63、 SD_2 は17.37であり、女子では M_2 は128.89、 SD_2 は14.15であった。

③個人ごとに、5段階評定尺度上で、中1と中2の間、中2と中3の間、以下、高IIと高IIIの間それぞれにおいて、項目得点がまったく変化しない項目数を算出し、これらを合計する。この合計値を x_3 とし、男女ごとにその平均(M_3)と標準偏差(SD_3)を求め、 $x_3 \geq M_3 + \frac{1}{2}SD_3$ となる者を安定群に、 $x_3 \leq M_3 - \frac{1}{2}SD_3$ となる者を不安定群にする。これが基準3である。なお、男子では M_3 は97.96、 SD_3 は20.25であり、女子では M_3 は108.04、 SD_3 は18.24であった。

このようにして、いずれの基準によっても安定群、あるいは不安定群に分類される者が、最終的な安定群、あるいは不安定群とされ、この両群に入らない者すなわち残りの者が中間群とされた。最終的な各グループの人数は表2に示したとおりである。

本報告では、既に述べた変化得点を中心に、安定群と不安定群について比較して検討するとともに、これらのグループの数事例をとりあげ、個人の社会的態度の変容

表2 各グループの人数 (人)

グループ 性別	安定群	不安定群	中間群	合計
男子	13	8	49	70
女子	12	13	45	70

過程を分析する。

Ⅲ 結果

1 変化得点の全般的分析

ここでは、分析対象者全員における変化得点と各グループにおける変化得点の全般的分析結果を中心にみる。

(1) 分析対象者全員の変化得点の全般的分析

表3、表4には、男女別に、安定群、不安定群、中間群、およびそれらのグループをまとめた分析対象者全員における学年間の変化得点の合計の平均と標準偏差を示した。

表3、表4それぞれの変化得点についてみる。分析対象者全員の変化得点は表中の合計の欄に示してあるが、これら学年間の変化得点の間に有意な差がみられるのかを検討した。相関のある場合のt検定を行い、その結果を表5に示した。表5によると、男女ともに、中1—中2と中2—中3という学年間の変化得点は他の学年間の変化得点と有意差がみられた。すなわち、中1—中2と中2—中3という学年間の変化得点は、他の学年間に

表3 学年間の変化得点の平均と標準偏差 (男子)

平均・標準偏差 学年間	グループ	安定群	不安定群	中間群	合計
		N=13	N=8	N=49	N=70
中1—中2	M	16.92	23.75	22.14	21.36
	SD	5.17	5.33	4.48	5.19
中2—中3	M	14.46	28.13	21.16	20.71
	SD	3.99	5.73	4.23	5.74
中3—高I	M	13.46	23.25	19.53	18.83
	SD	4.16	3.83	5.12	5.61
高I—高II	M	14.08	25.00	18.14	18.17
	SD	4.16	8.09	4.60	5.83
高II—高III	M	13.46	23.50	18.27	17.97
	SD	4.14	6.06	5.61	6.06
合計	M	72.38	123.62	99.24	97.04
	SD	12.93	12.42	15.32	20.25

表4 学年間の変化得点の平均と標準偏差 (女子)

学年間	グループ 平均・標準偏差	安定群	不安定群	中間群	合計
		N=12	N=13	N=45	N=70
中1-中2	M SD	14.08 2.98	24.38 3.10	19.87 3.92	19.71 4.77
中2-中3	M SD	13.75 3.19	22.69 2.64	18.89 4.27	18.71 4.69
中3-高I	M SD	11.92 2.29	22.08 4.20	16.40 3.26	16.69 4.51
高I-高II	M SD	9.75 3.17	21.77 5.35	15.89 3.25	15.93 5.17
高II-高III	M SD	11.25 3.94	19.08 3.73	16.24 3.92	15.91 4.56
合計	M SD	60.75 7.94	110.00 9.26	87.67 12.30	86.96 18.24

表5 学年間の変化得点の検定結果

学年間	中1-中2	中2-中3	中3-高I	高I-高II	高II-高III
中1-中2			***	***	***
中2-中3			***	***	***
中3-高I	**	**			
高I-高II	***	***			
高II-高III	***	***			

上段は女子, 下段は男子。

***; $P < .001$, **; $P < .01$, *; $P < .05$

以下の表において同様である。

表6 学年間の変化得点の相関係数

学年間	中1-中2	中2-中3	中3-高I	高I-高II	高II-高III
中1-中2		.555***	.437***	.461***	.488***
中2-中3	.313**		.515***	.469***	.471***
中3-高I	.218**	.479***		.590***	.362**
高I-高II	.198	.422***	.492***		.542***
高II-高III	.392***	.380***	.332**	.561***	

上段は女子, 下段は男子。男女それぞれ $N = 70$ 。

における変化得点よりも有意に高かった。また, 中1-中2, 中2-中3, 以下, 高II-高IIIという学年間の変化得点は, 男子では表3にみるとおり, 21.36, 20.71, 18.83, 18.17, 17.97, となり, 女子では表4にみるとおり, 19.71, 18.71, 16.69, 15.93, 15.91, となり, いずれも学年が進むにしたがって減少していることがわかる。

分析対象者全員について, 男女の変化得点の比較をする。表3, 表4の合計の欄の比較をすると, 中学1年から高校III年までの6年間分をまとめた学年間の変化得点の合計では, t 検定の結果, 1%水準で性差がみられた。また, 中2-中3, 中3-高I, 高I-高II, 高II-高IIIという学年間の変化得点では, いずれも5%水準で性差がみられた。これらは, いずれも男子の変化得点が高い変化得点よりも高かった。

表6には, 分析対象者全員における学年間の変化得点の間の相関係数を示した。これによると, 男子では中1-中2という学年間の変化得点と, 高I-高IIという学年間の変化得点との間には有意な相関がみられないが, これ以外の学年間の変化得点間には有意な相関がみられた。また, 女子ではすべての学年間の変化得点間に有意な相関がみられた。

(2) 各グループの変化得点の全般的分析

(a) 男子のグループについて

表3についてみる。相関のある場合の t 検定の結果, 安定群では, 学年間の変化得点の間にはいずれも有意差がみられなかった。

また, 不安定群では, 中2-中3と中3-高Iという学年間の変化得点間に有意差 ($P < .05$) がみられた以外, 学年間の変化得点間に有意差はみられなかった。

つぎに, 学年間の変化得点において, 安定群, 不安定群, 中間群の3群間に差がみられるのかを調べた。分散分析の結果, 学年間の変化得点すべてで有意差 ($P < .01$) がみられた。また, 学年間の変化得点を合計したのもでも, 3群間に有意差 ($P < .001$) がみられた。これらの変化得点は, いずれも安定群が最も低く, ついで中間群であり, 不安定群が最も高いことを示している。

(b) 女子のグループについて

表4についてみる。相関のある場合の t 検定の結果, 安定群では, 学年間の変化得点の間に有意差のみられたのは, 中1-中2と高I-高IIという学年間 ($P < .01$), 中2-中3と高I-高IIという学年間 ($P < .01$), 中3-高Iと高I-高IIという学年間 ($P < .05$) においてであった。すなわち, 高I-高IIという学年間の変化得点は, 中1-中2, 中2-中3, 中3-高Iという学年間の変化得点よりも有意に低かった。

不安定群では、学年間の変化得点の間に有意差のみられたのは、中1—中2と高Ⅱ—高Ⅲという学年間 ($P < .01$) 中2—中3と高Ⅱ—高Ⅲという学年間 ($P < .01$) においてであった。すなわち、高Ⅱ—高Ⅲという学年間の変化得点は、中1—中2、中2—中3という学年間の変化得点よりも有意に低かった。また、不安定群では表4にみるとおり、学年間の変化得点は、中1—中2、中2—中3、以下、高Ⅱ—高Ⅲと学年が進むにしたがって、24.38, 22.69, 22.08, 21.77, 19.08, となり、次第に減少する傾向がみられる。

つぎに、学年間の変化得点において、安定群、不安定群、中間群という3群間の差についてみる。分散分析の結果によると、学年間の変化得点すべてで有意差 ($P < .01$) がみられた。また、学年間の変化得点を合計したのもでも、3群間に有意差 ($P < .001$) がみられた。これらの変化得点は、いずれも安定群が最も低く、ついで中間群であり、不安定群が最も高いことを示している。これらの分散分析の結果は、男子の結果と同様である。

(3) グループごとの男女間の比較

まず、表3、表4から、安定群について男女の比較をする。t検定の結果、安定群では、高Ⅰ—高Ⅱという学年間の変化得点に有意な性差 ($P < .01$) がみられた。これは、男子の安定群の変化得点が女子の安定群の変化得点よりも高いことを示している。これ以外の学年間の変化得点には有意な性差がみられなかった。

つぎに、不安定群についてみる。t検定の結果、不安定群では、中2—中3という学年間の変化得点に有意な性差 ($P < .05$) がみられた。これは、男子の不安定群の変化得点が女子の不安定群の変化得点よりも高いことを示している。これ以外の学年間の変化得点には有意な性差はみられなかった。

2 各グループの項目別分析

ここでは、男女別に、中学1年から高校Ⅲ年までの6年間の変化得点を項目別にまとめたもの、すなわち項目変化得点を中心に、安定群と不安定群の特徴を明らかにし、両群の比較をする。

(1) 男子の安定群と不安定群

表7には、グループ別に、項目変化得点の平均と標準偏差を示した。

(a) 安定群について

表8には、安定群について表7のなかから項目変化得点の平均の低い項目の学年間の変化得点の平均を示した。これらの項目では、他の項目に比べ変化得点が低く、学年ごとにはあまり態度を変えることがないといえる。

項目変化得点の平均が低い項目をみると、評定尺度上

の「賛成」で反応が安定している者の多い項目は

20「先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する」

である。表9には、この項目に対する反応の度数分布を示してある。この表でみると、項目得点が4点となる者が多く、「賛成」という反応を多くの者がしていることがわかる。

また、「反対」という反応で安定している者の多い項目は

30「国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない」

である。表10には、この項目に対する反応の度数分布を示してある。表10をみると、項目得点が2点となる者が多く、「反対」という反応を多くの者がしていることがわかる。

「賛成とも反対ともいえない」という反応で安定している者の多い項目は

32「理論よりフィーリングやムードが大切である」

5「世間をわたるには義理や人情が最も大切である」という2項目である。表11には、項目32に対する反応の度数分布を示してある。この表をみると、項目得点が3点となる者が多く、「賛成とも反対ともいえない」で多くの者の反応が安定していることがわかる。項目5に対する反応も、ほぼ同様である。

安定群において、表7のなかから項目変化得点の平均が比較的高い項目を以下にあげておく。

33「誰が衆議員の選挙で当選しようと日本の政治はかわらないと思う」(2.85, 1.56)*

29「みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする」(2.54, 1.22)

10「世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない」(2.46, 1.28)

13「家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい」(2.46, 1.34)

37「いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない」(2.46, 1.28)

(b) 不安定群について

表12には、不安定群について表7のなかから項目変化得点の平均が高い項目の学年間の変化得点の平均を示した。これらの項目では、他の項目に比べ変化得点が高く、また学年の間の変化得点も高かった(表12)。

つぎに、不安定群において、相対的に項目変化得点の平均が低い項目を表7から選び、以下にあげておく。

* () 内の数字は項目変化得点の平均と標準偏差を示す。

表7 項目変化得点の平均と標準偏差

(男子)

項目 番号	安定群		不安定群		中間群		合計		有意差
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
1	2.23	0.97	3.00	1.32	2.57	1.25	2.56	1.23	
2	1.92	1.54	3.13	0.78	2.29	1.43	2.31	1.43	
3	1.85	0.86	3.00	1.41	2.61	1.31	2.51	1.30	
4	1.92	1.21	3.13	0.93	2.61	1.14	2.54	1.18	
5	1.38	0.84	3.25	1.09	2.45	1.36	2.34	1.35	**
6	2.15	1.23	2.50	1.32	2.63	1.17	2.53	1.22	
7	1.85	1.41	3.25	0.66	2.55	1.37	2.50	1.37	
8	1.46	1.01	3.25	0.66	2.51	1.13	2.40	1.18	***
9	2.15	1.17	3.38	0.99	2.59	1.23	2.60	1.24	
10	2.46	1.28	3.00	1.12	2.31	1.33	2.41	1.31	
11	1.54	1.08	3.00	1.32	2.29	1.50	2.23	1.47	
12	1.85	1.03	3.75	0.83	2.37	1.24	2.43	1.27	**
13	2.46	1.34	4.00	0.87	2.67	1.45	2.79	1.44	*
14	1.77	1.19	3.00	1.00	2.14	1.26	2.17	1.26	
15	1.77	0.97	3.50	0.50	2.45	1.39	2.44	1.33	*
16	1.54	1.22	2.63	0.70	2.67	1.33	2.46	1.33	*
17	1.85	1.10	3.13	0.60	2.73	1.21	2.61	1.20	*
18	2.31	1.54	3.00	1.41	2.57	1.21	2.57	1.32	
19	1.54	1.15	2.88	1.05	2.94	1.30	2.67	1.36	**
20	1.31	1.26	2.75	0.66	2.31	1.33	2.17	1.33	*
21	1.23	1.05	3.38	1.49	2.45	1.28	2.33	1.40	***
22	1.54	1.34	3.63	1.49	2.22	1.30	2.26	1.44	**
23	1.92	1.27	3.38	1.49	2.88	1.30	2.76	1.39	*
24	1.85	1.10	2.63	0.86	2.45	1.11	2.36	1.11	
25	1.62	1.08	3.00	0.87	2.49	1.55	2.39	1.47	
26	2.00	1.11	3.25	1.20	3.02	1.38	2.86	1.38	*
27	1.85	1.17	3.00	0.71	2.22	1.28	2.24	1.25	
28	1.77	1.42	3.63	0.99	3.00	1.18	2.84	1.33	*
29	2.54	1.22	3.38	1.11	2.51	1.43	2.61	1.39	
30	1.31	0.99	3.13	1.05	2.37	1.40	2.26	1.39	**
31	2.08	1.33	3.75	0.97	3.00	1.09	2.91	1.22	**
32	1.00	0.96	3.38	1.11	2.24	1.27	2.14	1.37	***
33	2.85	1.56	3.38	0.99	2.82	1.27	2.89	1.32	
34	2.23	1.62	3.13	1.05	2.71	1.05	2.67	1.20	
35	1.69	1.32	3.00	1.12	2.57	1.01	2.46	1.15	*
36	1.92	1.27	3.25	0.66	2.59	1.18	2.54	1.20	*
37	2.46	1.28	3.38	1.11	2.84	1.22	2.83	1.24	
38	1.69	1.26	2.50	0.87	2.55	1.26	2.39	1.27	
39	1.54	1.01	3.00	1.73	2.04	1.37	2.06	1.41	

表8 項目変化得点の低い項目(男子の安定群)

項目番号	項目内容	変化得点の平均					合計
		中1- 中2	中2- 中3	中3- 高I	高I- 高II	高II- 高III	
32(大6)	理論よりフィーリングやムードが大切である	.31	.08	.08	.23	.31	1.00
21(革8)	男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない	.46	.31	.31	.08	.08	1.23
20(革7)	先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する	.23	.15	.31	.38	.23	1.31
30(大4)	国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない	.38	.31	.15	.31	.15	1.31
5(保5)	世間をわたるには義理や人情が最も大切である	.38	.23	.23	.08	.46	1.38

表中合計の欄は項目変化得点の平均と等しい。
このことは表12, 表17, 表20についても同様である。

表9 項目20における項目得点の分布(男子の安定群)

20 先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する。(人)

項目得点		1	2	3	4	5
学年						
中	1	0	0	3	8	2
中	2	0	0	1	11	1
中	3	0	0	1	11	1
高	I	0	0	4	7	2
高	II	0	1	1	9	2
高	III	0	0	3	9	1

*表中に示された項目得点は、5が「非常に賛成」、4が「賛成」、3が「賛成とも反対ともいえない」、2が「反対」、1が「非常に反対」の項目反応にそれぞれ対応している。

以下の表においても同様である。

表10 項目30における項目得点の分布(男子の安定群)

30 国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない(人)

項目得点		1	2	3	4	5
学年						
中	1	1	7	4	0	1
中	2	0	12	1	0	0
中	3	1	10	2	0	0
高	I	0	12	1	0	0
高	II	3	10	0	0	0
高	III	3	10	0	0	0

表11 項目32における項目得点の分布(男子の安定群)

32 理論よりフィーリングやムードが大切である。(人)

項目得点		1	2	3	4	5
学年						
中	1	0	3	8	2	0
中	2	0	0	12	1	0
中	3	0	1	11	1	0
高	I	0	1	12	0	0
高	II	0	2	11	0	0
高	III	0	4	9	0	0

6「長男が家をつぐのは当然だ」(2.50, 1.32)

38「皆と同じような持物や服装をしていないとひげめを感じる」(2.50, 0.87)

16「いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごとは断った方がよい」(2.63, 0.70)

24「『方角が悪い』などということはまったく信用しない」(2.63, 0.86)

20「先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する」(2.75, 0.66)

(c)安定群と不安定群の比較

本項の(a), (b)でみたように、安定群と不安定群の項目変化得点には明らかな違いを認めることができる。安定群の項目変化得点が全体としてかなり低いのに比べ、不安定群の項目変化得点は全体としてかなり高い。

このことは、表7の分散分析の結果をみるとよくわか

表 12 項目変化得点の高い項目（男子の不安定群）

項目番号	項目内容	変化得点					合計
		中1- 中2	中2- 中3	中3- 高I	高I- 高II	高II- 高III	
13（保13）	家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい	.88	1.00	.50	1.00	.63	4.00
12（保12）	デモやストでさわぐのは民主国家の恥である	.75	.88	.50	.88	.75	3.75
31（大5）	中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい	.75	1.00	.88	.63	.50	3.75
22（革9）	政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである	.75	.75	.75	.88	.50	3.63
28（大2）	労働者や大学生のストライキやデモ活動などに関心がない	.75	.88	.63	.75	.63	3.63

る。表7には、安定群、不安定群、中間群の3群について、各項目の項目変化得点を比較するために行なった分散分析の結果も示した。表7のとおり、3群間に差のみられたものは、39項目のうち約半数の19項目である。これら19項目では、いずれも安定群の項目変化得点が、不安定群の項目変化得点よりも有意に低い。表13に、分散分析の結果、3群間に有意差のみられた項目を示しておく。

表13から、3群間に有意差のみられた項目について安定群の項目が評定尺度上のどのような反応で安定しているかをみる。

賛成方向で反応が安定している者の多い項目は

15「正しいことであれば世間体など気にすべきでない」

16「いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごととは断った方がよい」

20「先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する」

21「男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない」

26「家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである」

という項目である。項目20に対する反応の度数分布は、すでに表9に示してある。表14には、項目21に対する反応の度数分布を示してある。これらの表をみると、項目得点が4点あるいは5点となる者が多く、「賛成」あるいは「非常に賛成」で多くの者の反応が安定していることがわかる。同様なことは、項目15、16、26に対する反

応についてもいえる。

「反対」で反応が安定している者の多い項目は

30「国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない」

という項目である。この項目に対する反応の度数分布はすでに表10に示したとおりである。

「賛成とも反対ともいえない」で安定した反応をしている者が多い項目は

5「世間をわたるには義理や人情が最も大切である」

22「政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである」

32「理論よりフィーリングやムードが大切である」

という項目である。これらの項目のうち、項目32に対する反応の度数分布は、すでに表11に示してある。ここでは、項目22に対する反応の度数分布を表15に示した。表11、表15をみてわかるように、項目得点が3点となる者が多く、「賛成とも反対ともいえない」で安定した反応をしている者が多い。

（2）女子の安定群と不安定群

表16には、女子のグループ別に、項目変化得点の平均と標準偏差を示した。

（a）安定群について

表17には、安定群について表16のなかから項目変化得点の平均が低い項目の学年間の変化得点の平均を示した。これらの項目では、他の項目に比べ変化得点が低く、また表17からわかるように学年ごとにより態度を変えることがない。

表 13 安定群, 不安定群, 中間群の項目変化得点に有意差のある項目

項目番号	項 目 内 容	男子	女子
1 (保 1)	国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい		***
3 (保 3)	結婚は家柄を重んじなければならない		**
4 (保 4)	伝統や習慣は尊重すべきである		*
5 (保 5)	世間をわたるには義理や人情が最も大切である	**	**
6 (保 6)	長男が家をつぐのは当然だ		**
8 (保 8)	目上の人にはもっと敬語を使った方がよい	***	***
12 (保12)	デモやストでさわぐのは民主国家の恥である	**	***
13 (保13)	家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい	*	
15 (革 2)	正しいことであれば世間体など気にすべきでない	*	
16 (革 3)	いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごとは断った方がよい	*	
17 (革 4)	社会のために正しいことであるなら親の反対をおし切っても行動すべきである	*	***
19 (革 6)	デモやストをするのは労働者の当然の権利である	**	***
20 (革 7)	先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する	*	*
21 (革 8)	男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない	***	*
22 (革 9)	政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである	**	*
23 (革10)	家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである	*	
25 (革12)	結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい		***
26 (革13)	家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである	*	
28 (大 2)	労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない	*	**
30 (大 4)	国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない	**	*
31 (大 5)	中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい	**	*
32 (大 6)	理論よりフィーリングやムードが大切である	***	**
35 (大 9)	共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする	*	**
36 (大10)	ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどろだ	*	
38 (大12)	皆と同じような持物や服装をしていないとひげめを感じずる		**

表 14 項目21における項目得点の分布(男子の安定群)

21 男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない。(人)

学年	項目得点	項目得点				
		1	2	3	4	5
中	1	0	0	4	5	4
中	2	0	0	6	6	1
中	3	0	0	4	7	2
高	I	0	0	2	11	0
高	II	0	0	3	10	0
高	III	0	0	3	9	1

表 15 項目22における項目得点の分布(男子の安定群)

22 政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである。(人)

学年	項目得点	項目得点				
		1	2	3	4	5
中	1	0	1	7	4	1
中	2	0	0	12	1	0
中	3	0	1	10	2	0
高	I	0	1	11	1	0
高	II	0	0	10	3	0
高	III	0	0	12	1	0

表 16 項目変化得点の平均と標準偏差 (女子)

項目 番号	安定群		不安定群		中間群		合計		有意差
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
1	1.67	0.85	3.31	0.99	2.51	1.09	2.51	1.14	***
2	1.08	1.44	2.38	1.27	1.69	1.44	1.71	1.47	
3	1.17	0.90	2.77	1.19	2.11	1.35	2.07	1.35	**
4	1.17	1.14	2.46	1.65	2.53	1.33	2.29	1.46	*
5	1.00	1.00	2.62	1.39	2.18	1.39	2.06	1.42	**
6	1.58	1.04	2.69	1.38	2.82	1.14	2.59	1.26	**
7	2.50	0.96	2.92	1.14	2.20	1.36	2.39	1.29	
8	0.92	0.86	3.15	0.95	2.24	1.25	2.19	1.32	***
9	1.42	1.32	2.54	1.08	2.31	1.28	2.20	1.30	
10	1.83	1.14	3.23	1.12	2.18	1.22	2.31	1.27	
11	1.83	1.67	2.46	1.08	1.80	1.34	1.93	1.40	
12	1.17	1.14	3.46	1.15	2.11	1.16	2.20	1.35	***
13	2.33	1.31	2.69	1.26	2.60	1.22	2.57	1.25	
14	1.83	0.90	2.46	1.15	1.69	1.33	1.86	1.27	
15	1.75	1.09	2.77	1.25	2.40	1.42	2.36	1.37	
16	1.67	1.60	2.54	0.93	2.18	1.18	2.16	1.25	
17	0.83	0.90	3.46	1.08	2.07	1.34	2.11	1.46	***
18	2.33	1.43	3.00	1.41	2.31	1.23	2.44	1.33	
19	1.17	1.21	3.38	0.92	2.31	1.28	2.31	1.38	***
20	1.25	1.23	2.62	1.21	1.87	1.20	1.90	1.28	*
21	1.83	1.46	3.08	1.07	2.04	1.19	2.20	1.29	*
22	1.00	1.15	2.38	1.39	2.07	1.32	1.94	1.38	*
23	1.67	1.43	2.85	1.17	2.44	1.24	2.39	1.31	
24	1.50	1.04	2.62	0.84	2.40	1.39	2.29	1.30	
25	1.08	1.26	3.54	0.84	2.42	1.27	2.40	1.41	***
26	2.00	1.22	2.31	1.44	2.67	1.35	2.49	1.37	
27	1.42	0.86	2.38	0.84	2.16	1.30	2.07	1.20	
28	1.58	1.11	3.45	1.01	2.69	1.36	2.66	1.39	**
29	1.75	1.01	2.00	1.36	2.33	1.21	2.17	1.23	
30	1.17	0.90	2.46	1.08	2.18	1.45	2.06	1.37	*
31	1.75	0.92	3.08	1.21	2.78	1.33	2.66	1.32	*
32	1.17	1.07	3.15	0.86	1.80	1.29	1.94	1.34	**
33	1.92	1.04	3.00	1.04	2.60	1.14	2.56	1.15	
34	2.25	1.16	2.62	1.50	2.11	1.25	2.23	1.30	
35	1.25	1.09	2.77	1.05	1.91	1.26	1.96	1.28	**
36	2.42	1.04	2.77	1.25	2.29	1.26	2.40	1.24	
37	1.75	1.09	3.00	1.18	2.29	1.33	2.33	1.32	
38	1.75	1.16	3.31	1.38	2.27	1.25	2.37	1.35	**
39	1.00	1.29	2.23	1.31	1.73	1.64	1.70	1.57	

表 17 項目変化得点の低い項目（女子の安定群）

項目番号	項目内容	変化得点					合計
		中1- 中2	中2- 中3	中3- 高I	高I- 高II	高II- 高III	
17(革4)	社会のために正しいことであるなら親の反対をおし切っても行動すべきである	.17	.50	.17	.00	.00	.83
8(保8)	目上の人にはもっと敬語を使った方がよい	.33	.25	.17	.08	.08	.92
5(保5)	世間をわたるには義理や人情が最も大切である	.33	.17	.17	.08	.25	1.00
22(革9)	政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである	.25	.25	.08	.08	.33	1.00
39(大13)	公害問題は被害者と加害者だけの問題である	.33	.17	.08	.17	.25	1.00

表 18 項目39における項目得点の分布(女子の安定群)

39 公害問題は被害者と加害者だけの問題である。
(人)

項目得点 学年	1	2	3	4	5
中 1	5	5	2	0	0
中 2	3	7	2	0	0
中 3	5	5	2	0	0
高 I	5	4	3	0	0
高 II	4	6	2	0	0
高 III	6	3	3	0	0

表 19 項目17における項目得点の分布(女子の安定群)

17 社会のために正しいことであるなら親の反対をおし切っても行動すべきである。
(人)

項目得点 学年	1	2	3	4	5
中 1	0	0	9	3	0
中 2	0	0	8	2	2
中 3	0	0	9	3	0
高 I	0	0	11	1	0
高 II	0	0	11	1	0
高 III	0	0	11	1	0

項目変化得点の平均が低い項目をみると、評定尺度上の反対方向で反応が安定している者の多い項目は
39「公害問題は被害者と加害者だけの問題である」

という項目である。表18には、この項目に対する反応の度数分布を示してある。この表でみると、項目得点が2点あるいは1点となる者が多く、「反対」あるいは「非常に反対」という反応で多くの者が安定していることがわかる。

「賛成とも反対ともいえない」で反応が安定している者の多い項目は

17「社会のために正しいことであるなら親の反対をおし切っても行動すべきである」

22「政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである」

という項目である。これらの項目のうち、項目17に対する反応の度数分布を表19に示してある。表19をみると、項目得点が3点となる者が多く、「賛成とも反対ともいえない」で反応の安定している者が多いことがわかる。同様なことは項目22に対する反応についてもいえる。

安定群において、表16のなかから項目変化得点の平均が比較的高い項目を以下にあげておく。

7「親孝行は子どもの義務である」(2.50, 0.96)

36「ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどうだ」(2.42, 1.04)

13「家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい」(2.33, 1.31)

18「いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである」(2.33, 1.43)

34「今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい」(2.25, 1.16)

(b)不安定群について

表20には、不安定群について表16のなかから項目変化

表 20 項目変化得点の高い項目 (女子の不安定群)

項目番号	項目内容	変化得点					合計
		中1- 中2	中2- 中3	中3- 高I	高I- 高II	高II- 高III	
25 (革12)	結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい	.77	.85	.77	.62	.54	3.54
12 (保12)	デモやストでさわぐのは民主国家の恥である	.77	.77	.85	.54	.54	3.46
17 (革4)	社会のために正しいことであるなら親の反対をおし切っても行動すべきである	.62	.62	.77	.62	.85	3.46
28 (大2)	労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない	.85	.62	.85	.62	.54	3.46
19 (革6)	デモやストをするのは労働者の当然の権利である	.69	.77	.69	.69	.54	3.38

得点の平均が高い項目の学年間の変化得点の平均を示した。これらの項目では、他の項目に比べ変化得点が高く、また表20からわかるように学年の間の変化得点も高いことがわかる。

つぎに、不安定群において、相対的に項目変化得点の平均が低い項目を表16から選び、以下にあげておく。

29「みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする」(2.00, 1.36)

39「公害問題は被害者と加害者だけの問題である」(2.23, 1.31)

26「家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである」(2.31, 1.44)

2「女が政治などに口だしすべきでない」(2.38, 1.27)

22「政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである」(2.38, 1.39)

27「流行語など知らないはずかしい」(2.38, 0.84)

(c)安定群と不安定群の比較

本項の(a), (b)でみたように、安定群と不安定群の項目変化得点には、男子と同様に、明らかな違いを認めることができる。すなわち、安定群の項目変化得点が全体としてかなり低いのに比べ、不安定群の項目変化得点は全体としてかなり高い。

さらに、このことは表16にある分散分析の結果をみるとよくわかる。表16には、安定群、不安定群、中間群の3群について、各項目の項目変化得点を比較するために行った分散分析の結果も示した。表16のとおり、3群間に有意差のみられた項目は39項目のうち、ほぼ半数の19項目である。これらの項目では、いずれも安定群の項

目変化得点が不安定群の項目変化得点よりも有意に低かった。なお、表13には、男子の結果と比べやすいように分散分析の結果、3群の項目変化得点に有意差のみられた項目を示してある。13項目では男女ともに安定群と不安定群に有意差がみられた。

表13から、3群間に有意差のみられた項目について、ここでは安定群の項目が評定尺度上のどのような反応で安定しているかをみる。

「賛成」という反応で安定している者の多い項目は

20「先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する」

という項目である。表21には、この項目に対する反応の度数分布を示してある。この表をみると、項目得点が4点となる者が多く、「賛成」で多くの者の反応が安定しているとわかる。

反対方向で反応が安定している者の多い項目は

1「国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい」

3「結婚は家柄を重んじなければならない」

30「国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない」

という項目である。これらのうち、項目30に対する反応の度数分布を表22に示してある。この表をみると、項目得点が2点あるいは1点となる者が多く、「反対」あるいは「非常に反対」で多くの者の反応が安定していることがわかる。同様なことは、項目1, 3に対する反応についてもいえる。

「賛成とも反対ともいえない」で安定した反応をしている者の多い項目は

17「社会のために正しいことであるなら親の反対をお

表 21 項目20における項目得点の分布(女子の安定群)

20 先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで論議する。(人)

学年	項目得点	1	2	3	4	5
中	1	0	0	0	10	2
中	2	0	0	2	8	2
中	3	0	0	3	6	3
高	I	0	0	2	9	1
高	II	0	0	3	9	0
高	III	0	0	2	10	0

表 22 項目30における項目得点の分布(女子の安定群)

30 国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない。(人)

学年	項目得点	1	2	3	4	5
中	1	2	8	2	0	0
中	2	0	10	2	0	0
中	3	2	7	3	0	0
高	I	2	8	2	0	0
高	II	1	10	1	0	0
高	III	2	8	2	0	0

し切っても行動すべきである」

22「政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである」

という項目である。これらのうち、項目17に対する反応の度数分布は、すでに表19に示してある。表19をみるとわかるように、項目得点が3点となる者が多く、「賛成とも反対ともいえない」で多くの者の反応が安定している。

(3) グループごとの男女間の比較

(a)安定群について

男子の安定群と女子の安定群のそれぞれにおいて、項目変化得点の平均が低い項目のうち、男女に共通するものは

5「世間をわたるには義理や人情が最も大切である」という項目である。

また、男子の安定群と女子の安定群の項目変化得点に有意差のみられた項目はつぎの1項目である。

17「社会のために正しいことであるならば親の反対をおし切っても行動すべきである」(P<.05)

この項目では、男子の安定群の項目変化得点、女子の安定群の項目変化得点よりも高い(表7、表16)。女子

の安定群は、この項目に対して「賛成とも反対ともいえない」という反応で安定している者が多い(表19)。

(b)不安定群について

男子の不安定群と女子の不安定群のそれぞれにおいて、項目変化得点の平均が高い項目のうち、男女に共通するものは

12「デモやストでさわぐのは民主国家の恥である」

28「労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない」

の2項目である。

また、男子の不安定群と女子の不安定群の項目変化得点に有意差のみられたのはつぎの2項目である。

13「家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい」(P<.05)

29「みんながみているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする」(P<.05)

これらの項目では、いずれも男子の不安定群の項目変化得点、女子の不安定群の項目変化得点よりも高い(表7、表16)。

3 事例分析

ここでは男女それぞれの安定群、不安定群から次の基準に合致する事例を選択し、各事例の項目反応とその変化を分析する。

1. 年次ごとにみて項目反応の分布に大きな片寄りが無いこと。
2. 中1—中2から高II—高IIIまで5つの学年間の変化得点がグループ全体の傾向と大きくずれないこと。
3. 変化得点の上でグループを特徴づけると考えられる項目において、グループの全体の傾向と同様の変化得点を示していること。すなわち、各グループにおける項目変化得点の上、下5位までの項目のうち、項目変化得点の散らばりの少ない項目($SD \leq 1.00$)において変化得点値がグループの平均変化得点値と大きくずれないこと。

これらの基準によって選択された事例は男子安定事例3ケース、男子不安定事例2ケース、女子安定事例3ケース、女子不安定事例4ケースである。

事例の分析にあたっては次の点に着目する。

1. 男女それぞれの安定群、不安定群の分析で明らかにされた各グループで項目変化得点の平均値の高い項目および低い項目での各事例の反応がグループ全体の傾向と対応しているか否か。
2. 男女ともに、安定群・不安定群間に項目変化得点の平均値の有意な差のみられた項目においてどのような反応が示されているか。

表 23 男子安定 3 事例の変化得点および項目得点

			項目変化得点下位項目					項目変化得点上位項目				
			5	32	30	21	20	13	33	29	10	37
事例 3001	項目変化得点		1	1	1	3	0	4	5	4	2	2
	各 学 年 項 目 得 点	中 1	4	3	2	5	5	4	3	3	3	3
		中 2	3	3	2	3	5	3	2	2	3	3
		中 3	3	3	2	5	5	2	5	1	2	4
		高 I	3	3	2	4	5	3	2	2	3	4
		高 II	3	3	1	4	5	2	3	2	3	4
		高 III	3	2	1	4	5	2	2	1	3	2
事例 3005	項目変化得点		2	2	1	1	2	2	3	3	2	3
	各 学 年 項 目 得 点	中 1	3	4	3	5	4	5	4	2	3	3
		中 2	3	3	3	5	4	4	4	3	3	2
		中 3	3	3	2	4	4	2	3	2	2	3
		高 I	2	3	2	4	5	2	3	3	2	3
		高 II	2	2	2	4	4	2	5	3	2	3
		高 III	3	2	2	4	4	2	4	3	3	1
事例 3024	項目変化得点		1	0	2	1	2	2	2	1	2	4
	各 学 年 項 目 得 点	中 1	3	3	2	4	4	2	1	2	3	3
		中 2	3	3	2	3	4	2	3	2	3	2
		中 3	3	3	1	3	4	3	4	1	3	2
		高 I	2	3	2	3	4	3	4	1	4	3
		高 II	2	3	2	3	5	3	4	1	4	2
		高 III	2	3	2	3	4	2	4	1	3	3

これらの分析を通して、ここでは、安定群・不安定群の分析で示されたそれぞれのグループの全般的特性が、各々の事例の中でも同様に見出されるかを明らかにする。

(1) 男子における安定事例と不安定事例

(a) 男子の安定事例

男子の安定事例としては事例番号 3001, 3005, 3024 の 3 ケースが選択された。安定群で変化得点の平均値の高い 5 項目、および低い 5 項目における各事例の変化得点と、6 年間の項目得点とを表 23 に掲げる。

これによれば 3 ケースとも、全体としては項目変化得点の平均値の高い項目では項目変化得点が高く、平均項目変化得点値の低い項目では項目変化得点が高い。

項目得点水準でみて 3 事例ともに安定傾向の高い項目は

- 5 「世間をわたるには義理や人情が最も大切である」
- 30 「国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない」

20 「先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する」

の 3 項目、および

10 「世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない」（項目変化得点上位項目）

である。

一方、3 事例ともに不安定傾向の高い項目としては

33 「誰が衆議員の選挙で当選しようと日本の政治は変わらないと思う」

が挙げられる。その他の項目に関しては事例によって異なった結果が示されており、それぞれ以下のようになっている。

事例 3001; 32 「理論よりフィーリング（項目内容を要約——以下同様——）」で安定、37 「金がなければ幸福になれぬ」で不安定。

事例 3005; 21 「男女交際は自由」で安定、13 「父が実権を握るべきだ」で不安定（賛成から反対へ変化）。

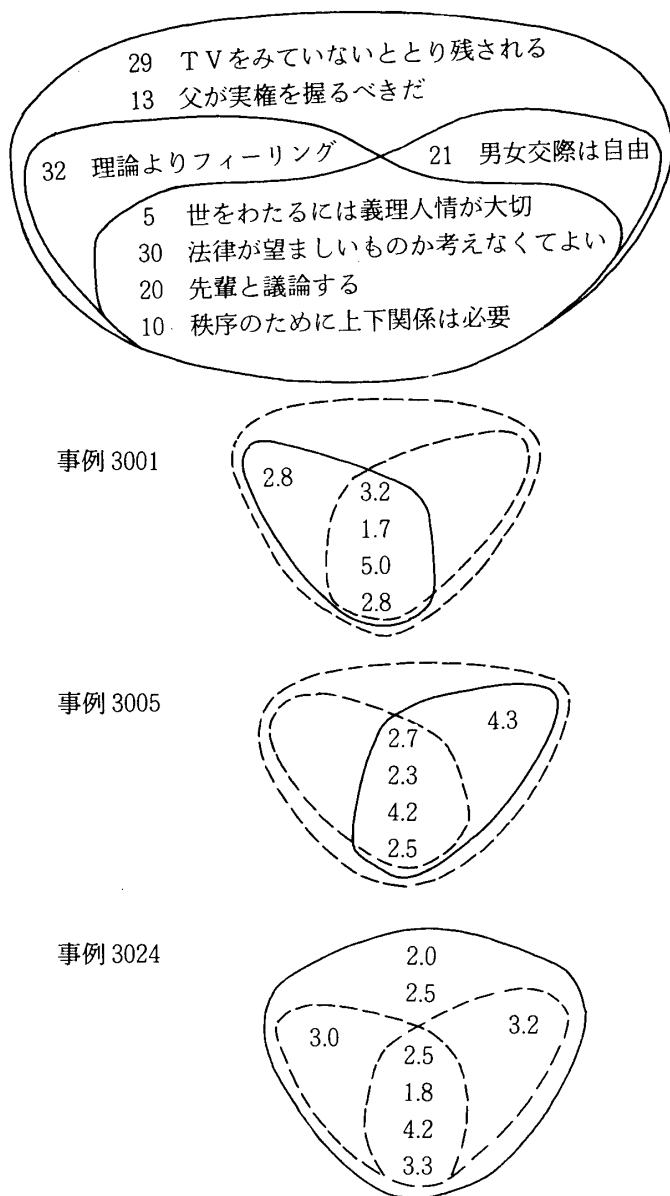


図1 男子安定3事例での安定傾向の高い項目

事例3024;事例3001 および3005で安定していた32「理論よりフィーリング」、21「男女交際は自由」および13「父が実権を握るべきだ」、29「TVを見ていないととり残される」で安定。

各事例の安定している項目の関係を図1に図示し、さらに各々で安定している項目での項目得点の6年間の平均値を示す。

前の分析で項目変化得点にグループ差のみられた項目のうち、男女に共通しているものをひろい、デモ・スト、政治、家庭、対人関係の4つに分け、それぞれの項目での項目得点の値を事例ごとに示す(表24)。これと図

1とから、各事例のプロフィールを描いてみる。

事例3001;先輩とはとことん議論すべきであり、法律が望ましいものかどうかもある必要があると考えている。しかしながら、現実の社会・政治状況に対しては中間点(「賛成とも反対ともいえない」)を中心にした反応が多く、また義理・人情や敬語など保守的対人関係に対する態度(項目5, 8)も留保されている。

事例3005;事例3001と同様、先輩とでも納得するまで議論すべきであり、男女交際は周囲でとやかく言うべきでないと考えている。また親にさからっても社会正義に従うべきだとしている。以上の点では一貫して安定した態度を示しているものの、6年間の間にデモ・ストを恥だとする見方から権利だとみなすように変わり、「政治よりもレジャー」という考えにも賛成から反対へ、敬語についても賛成からどちらでもないへと、変化がみられる。

事例3024;先輩とは納得できるまで議論すべきであり、国の法律の望ましきについても考える必要があると考えている。全体に安定傾向が高いが、政治、家庭、対人関係すべてに微小な変化がみられる。男女交際以外については、この変化はいわゆる革新的な態度への変化とみることができよう。

(b)男子の不安定事例

男子の不安定事例として4605, 3017の2ケースが選択された。結果を表25に示す。全体的に見るといずれのケースにおいても項目変化得点上位の項目で変化得点が高く、下位項目の方で項目変化得点が高い。

項目得点の水準でみると、

- 12「デモやストでさわぐのは民主国家の恥である」
- 28「労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない」
- 22「政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである」
- 24「『方角が悪い』などということはまったく信用しない」(変化得点下位項目)

では変動が大きく、

- 16「いくら恩義のある人でも筋道のとらない頼みごととは断った方がよい」

で比較的安定(事例3017では変化得点は3であるが、変化の幅は小さいので、ここでは安定していると扱った)している。その他の項目について事例ごとにみても以下のようになる。

事例4605;20「先輩と議論」で安定、6「長男があとを継ぐべきだ」、13「父が実権を握るべきだ」、33「皆と同じ服装をせぬと不安」では変化が大きい。

事例3017;6「長男があとを継ぐべきだ」、13「父が実

表 24 男女共通してグループ間差のある項目における各事例の項目得点

性	グループ	項目 学 年 事 例	デモ・スト															政 治																				
			12					19					28					22					30					31										
			中	中	中	高	高	中	中	中	高	高	中	中	中	高	高	中	中	中	高	高	中	中	中	高	高	中	中	中	高	高						
男	安 定	3001	3	3	2	3	2	2	4	4	3	3	4	4	3	3	3	3	3	3	4	3	2	3	3	3	2	2	2	2	1	1	2	3	3	3	3	2
		3005	5	3	2	2	2	2	1	3	3	3	3	4	3	4	3	3	3	2	3	3	4	3	3	3	3	3	2	2	2	2	5	4	2	2	2	2
		3024	3	3	2	2	2	2	2	3	4	3	4	4	3	3	3	3	2	2	3	3	3	3	4	4	2	2	1	2	2	2	3	3	3	3	2	3
	不 安 定	4605	5	3	1	1	3	2	5	5	5	5	4	4	3	3	2	5	3	2	1	3	3	3	4	3	3	1	2	4	2	2	5	5	4	5	4	3
		3017	3	5	1	1	3	2	5	2	5	5	4	4	3	2	5	3	1	3	5	5	1	3	1	3	1	1	1	2	1	2	3	2	5	3	1	2
		3204	3	3	2	3	4	3	3	3	5	4	3	4	3	4	2	2	3	2	4	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	3	3	3	2	4	4
女	安 定	3215	2	2	2	2	2	2	4	4	4	3	4	4	3	3	3	3	4	4	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	1	1	4	4	3	4	4	4
		3227	3	3	4	3	3	3	3	2	2	2	2	2	4	2	2	2	2	2	4	4	3	3	2	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
		4804	3	2	5	2	3	3	2	2	1	4	4	4	3	5	5	3	4	4	3	3	3	2	2	3	2	2	3	1	2	1	3	3	3	5	2	3
	不 安 定	4828	3	1	3	1	1	2	5	4	2	3	4	5	3	2	1	1	1	2	3	5	3	3	3	3	3	2	1	3	3	2	3	2	2	2	2	2
		3213	4	3	4	2	2	2	1	2	1	2	3	2	5	3	4	3	3	3	4	4	2	3	3	3	5	2	2	2	2	3	4	2	2	2	2	2
		3221	3	4	2	3	2	3	3	2	4	3	4	4	4	3	4	3	5	4	3	4	3	3	5	5	3	1	2	4	4	4	4	3	2	4	5	5

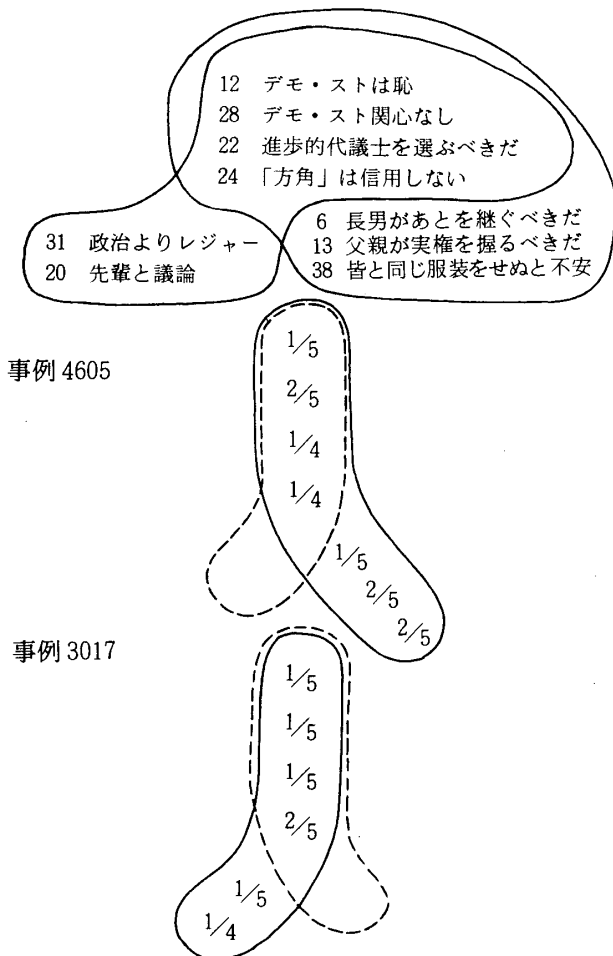


図 2 男子不安定事例での不安定傾向の高い項目

* 図中斜線左上の数字は項目得点の最少値を
右下の数字は最大値を示す。

権を握るべきだ」で安定。31「政治よりレジャー」、20「先輩と議論」で変動が大きい。

各事例での不安定な項目の関係を図 2 に図示し、さらにそれぞれの事例での不安定な項目での項目得点の最大値と最小値を示す。

表 24、図 2 をもとに両事例の社会的態度をまとめてみると以下のようなになるであろう。

事例 4605；政治・社会的問題に対する態度で変動が大きいほか、長男相続や父親の実権のあり方に対しても変動しやすいことに特徴がある。一貫して恩義より筋道を重視し、男女交際には周囲がとやかく言うべきでないという態度を示しているが、一方義理人情を否定するわけではなく、先輩との議論にも必ずしも積極的でない。

事例 3017；政治社会的問題に対する態度で変動が大きいに加え、レジャーへの関心も変動しやすい。そのほか義理人情、敬語、先輩との議論など直接的対人関係のあり方についての態度も安定しない。しかしながら、事例 4605 とは違って長男相続、父権などの男性中心の価値観に対する態度は一貫して否定的である。

(c)男子における安定事例と不安定事例の比較

男子の安定群および不安定群から抽出された事例の分析から、以下のことが指摘できよう。

1) 安定群・不安定群それぞれにおいて、項目変化得点の平均値の上位・下位の項目をみた場合、同じ安定群に属する事例においても、多数の事例に共通して安定(ないし不安定)傾向の高い項目と、特定事例に固有の安定

家 庭					対 人 関 係					そ の 他																															
17		21			5		8			20			32			35																									
中	中	中	高	高	中	中	中	高	高	中	中	中	高	高	中	中	中	高	高																						
1	2	3	I	II	III	1	2	3	I	II	III	1	2	3	I	II	III	1	2	3	I	II	III																		
3	3	3	3	3	3	5	3	5	4	4	4	4	3	3	3	3	3	4	4	3	3	3	3	5	5	5	5	5	5	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2
4	5	4	4	4	4	5	5	4	4	4	4	3	3	3	2	2	3	5	4	3	3	3	3	4	4	4	5	4	4	4	3	3	3	2	2	1	1	1	3	2	2
4	5	3	4	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4	5	4	3	3	3	3	3	3	1	2	3	3	2	3
3	3	3	4	2	3	5	5	5	5	5	5	3	4	4	4	4	3	3	1	4	3	3	4	3	3	3	4	3	3	3	5	3	4	3	4	3	2	5	3	3	3
4	3	3	3	3	4	3	5	5	3	3	3	4	5	3	4	1	3	2	4	3	3	4	3	4	3	1	3	3	3	2	1	1	3	1	2	1	3	3	3	2	3
3	5	3	3	3	3	3	3	4	3	4	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	3	3	4	5	5	4	4	4	3	2	2	2	2	2	1	1	2	2	2	2
4	5	4	4	4	4	5	5	5	4	5	4	4	4	4	4	4	4	3	3	2	3	3	3	4	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	1	1	2	2	1	1
3	3	3	3	3	3	4	4	2	3	2	2	3	3	2	2	2	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	3	3	3	3	2	2	2	1	2	3	3	3
4	4	2	3	4	2	5	5	1	5	4	5	4	4	3	2	2	2	3	4	4	5	5	5	4	5	3	4	4	3	3	2	1	1	3	2	2	1	1	1	2	2
5	3	3	5	4	5	5	5	5	5	5	4	3	3	3	4	5	4	1	4	3	3	3	4	5	5	5	5	4	4	3	1	2	3	2	2	1	2	3	3	3	2
2	2	3	4	4	3	2	3	2	2	2	3	5	4	3	4	3	2	4	4	3	2	2	3	5	4	4	3	3	3	4	3	2	2	3	3	2	2	2	2	3	3
2	3	3	3	3	2	4	3	4	3	4	3	2	2	2	3	3	3	4	4	4	3	4	4	5	4	4	4	4	4	3	3	3	2	4	3	3	2	3	2	1	1

(ないし不安定)傾向の高い項目とを見出すことができる。

2) 事例間に共通して安定傾向の高い項目は、安定事例の方に多く、不安定事例の方に少ない。また不安定傾向の高い項目については不安定事例に多く安定事例に少

ない。

3) 事例間に共通して安定傾向の高い項目は安定事例では5, 30, 20, 10であり不安定事例では(明確ではないが)16である。

4) 事例間に共通して不安定傾向の高い項目は不安定

表 25 男子不安定2事例の変化得点および項目得点

		項目変化得点上位項目					項目変化得点下位項目					
		12	31	22	28	13	16	20	38	24	6	
事 例 4605	項目変化得点	4	4	3	4	4	3	2	3	2	2	
	各 学 年 項 目 得 点	中 1	5	5	1	3	3	5	3	3	1	5
		中 2	3	5	3	3	5	5	3	5	1	1
		中 3	1	4	3	2	2	4	3	2	1	1
		高 I	1	5	3	5	2	4	4	3	2	1
		高 II	3	4	4	3	4	5	3	3	2	1
高 III	2	3	3	2	3	4	3	3	4	3		
事 例 3017	項目変化得点	4	5	4	5	3	3	3	1	3	1	
	各 学 年 項 目 得 点	中 1	3	3	5	3	1	4	4	2	5	1
		中 2	5	2	5	2	2	3	3	3	3	1
		中 3	1	5	1	5	1	3	1	3	3	1
		高 I	1	3	3	3	1	3	3	3	3	1
		高 II	3	1	1	1	2	4	3	3	2	2
高 III	2	2	3	3	2	3	3	3	4	2		

事例では12, 28, 22, 24, 安定事例では33である。

(2) 女子における安定事例と不安定事例

(a) 女子の安定事例

女子の安定事例としては事例番号3204, 3215, 3227の3ケースが選択された。結果は表26に示す。

ここに掲げた項目のうち、3ケースが共通して安定傾向を示しているのは、

- 5「世間をわたるには義理や人情が最も大切である」
- 39「公害問題は被害者と加害者だけの問題である」
- 8「目上の人にはもっと敬語を使った方がよい」

の3項目である。一方、

- 7「親孝行は子どもの義務である」
- 34「今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい」

の2項目では3ケースとも共通して変動の幅が大きい。

その他の項目に関する結果を事例ごとにまとめると、事例3204; 13「父が実権を握るべきだ」、36「政治問

題を考えるのはめんどろ」、22「進歩的代議士を選ぶべきだ」で安定、18「伝統より合理性」で不安定。

事例3215; 17「親より社会主義」、18「伝統より合理性」、22「進歩的代議士を選ぶべきだ」で安定、13「父が実権を握るべきだ」、36「政治問題など考えるのはめんどろ」で不安定。

事例3227; 事例3204, 3215の安定している項目のうち22以外すなわち、13, 36, 17, 18で安定。

これらの結果をまとめて図3に示した。

次に表24を参考にしながら各事例のプロフィールをまとめてみる。

事例3204; 公害は当事者だけの問題ではなく、政治は政治家任せにすべきではないと考える。これは先輩との議論というような直接的な対人関係の場でも貫かれている。しかしながら現実の社会・政治的問題に対する態度では変動や判断留保が多い。

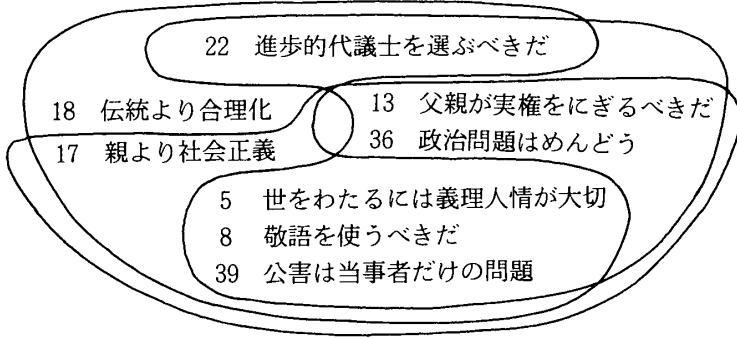
事例3215; 親よりも社会正義の方が大切であり、先輩とは十分議論すべきだとしながら、一方世間をわたるに

表 26 女子安定3事例の変化得点および項目得点

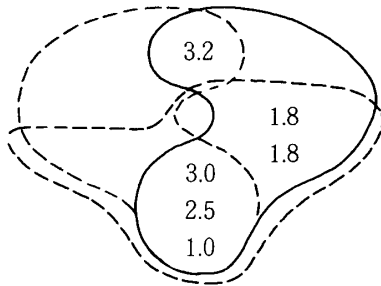
			項目変化得点下位項目					項目変化得点上位項目				
			5	17	8	22	39	7	13	36	18	34
事例 3204	項目変化得点		0	2	2	1	0	3	2	2	3	3
	各 学 年 項 目 得 点	中 1	3	3	3	4	1	4	2	2	3	4
		中 2	3	5	2	3	1	5	2	1	4	4
		中 3	3	3	2	3	1	3	1	2	3	3
		高 I	3	3	2	3	1	4	2	2	3	2
		高 II	3	3	3	3	1	4	2	2	3	3
		高 III	3	3	3	3	1	4	2	2	2	3
事例 3215	項目変化得点		0	2	2	0	1	3	5	3	2	4
	各 学 年 項 目 得 点	中 1	4	4	3	3	2	4	4	2	3	4
		中 2	4	5	3	3	2	4	3	2	2	3
		中 3	4	4	2	3	2	3	2	3	2	4
		高 I	4	4	3	3	2	3	3	2	3	3
		高 II	4	4	3	3	2	2	2	2	3	2
		高 III	4	4	3	3	1	3	1	1	3	2
事例 3227	項目変化得点		2	0	0	3	0	4	2	2	5	4
	各 学 年 項 目 得 点	中 1	3	3	4	4	2	4	2	2	3	4
		中 2	3	3	4	4	2	4	2	2	4	5
		中 3	2	3	4	3	2	2	2	2	3	4
		高 I	2	3	4	3	2	4	2	2	4	4
		高 II	2	3	4	2	2	3	3	3	3	2
		高 III	3	3	4	3	2	4	2	2	4	4

は義理や人情が大切であるとしている。

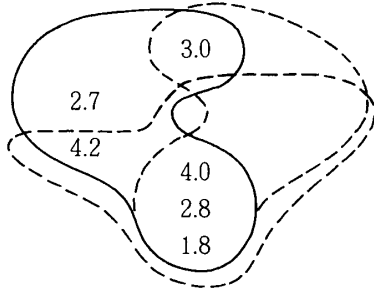
事例3227; 公害は当事者だけの問題ではなく、中学生・高校生も政治の問題について関心を持つべきであり、先輩とも納得のいくまで議論すべきだと考えるが、目上の人にもっと敬語を使うべきであると考えている。また中1-中2でデモ・ストに関心を持つようになっただが、同



事例 3204



事例 3215



事例 3227

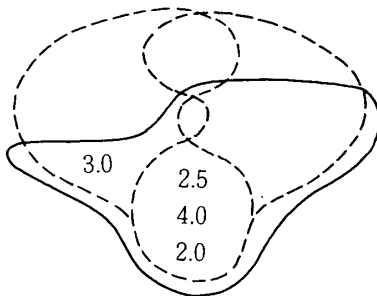


図3 女子安定3事例での安定傾向の高い項目

時にそれは当然の権利とは認めないという変化を伴っている。

(b)女子の不安定事例

女子の不安定事例としては事例番号4804, 4828, 3213, 3221の4ケースが選択された。結果を表27に示す。

この女子の不安定事例の場合には、

25「結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい」では4事例とも共通して不安定な傾向を示している。

その他の項目について、事例ごとにみていくと、以下のようになる。

事例4804; 39「公害は当事者だけの問題だ」、22「進歩的代議士を選ぶ」、27「流行語を知らないと恥」の3項目で安定。2「女が政治に口だしすべきでない」、17「親より社会正義」、26「親子対等」、12「デモ・ストは恥」、19「デモ・ストは権利」の5項目で不安定な傾向。

事例4828; 2「女が政治に口だしすべきでない」、26「親子対等」、29「TVをみていないととりのこされる」の3項目で安定。19「デモ・ストは権利」で変動傾向大。

事例3213; 39「公害は当事者だけの問題」、2「女は政治に口だしすべきでない」の2項目で安定。22「進歩的代議士を選ぶ」、27「流行語を知らぬと恥」、26「親子対等」、17「親より社会正義」、29「TVを見ていないととりのこされる」、12「デモ・ストは恥」の6項目で変動傾向大。

事例3221; 39「公害は当事者だけの問題」、26「親子対等」、17「親より社会正義」の3項目で安定傾向が大きく、19「デモ・ストは権利」、12「デモ・ストは恥」、2「女は政治に口だしすべきでない」の3項目で不安定である。

不安定項目からみた事例の関連を図4のとおりである。

各事例のプロフィールをまとめてみると、次のようになる。

事例4804; デモ・スト、家族関係に関しては態度の変動が大きい。対人関係のあり方に対しては、義理人情の重視から、むしろ敬語の重視の方へ変化し、高校の3年間には世わりに義理人情は重要ではなく、目上の人にはもっと敬語を使うべきであり、また、デモ・ストは当然の権利であるという考えに安定してきている。

事例4828; 儀式の簡素化、敬語などについて、およびデモ・ストなど現実の政治的問題についての態度では変動が大きい。女も政治に関与すべきだとか家庭で親子が対等であるべきだというような平等な人間関係、男女交際の自由などの重視では一貫している。

事例3213; 皆と同じテレビ番組をみていないと取り残される気がする、流行語を知らないと恥ずかしいなど、

表 27 女子不安定 4 事例の変化得点および項目得点

		項目変化得点上位項目					項目変化得点下位項目						
		25	19	12	17	28	27	22	26	39	29	2	
事例 4804	項目変化得点	5	3	4	4	3	2	2	4	1	3	5	
	各 学 年 項 目 得 点	中 1	5	2	3	4	3	3	3	4	1	2	2
		中 2	3	2	2	4	5	4	3	2	1	3	3
		中 3	1	1	5	2	5	3	3	1	1	2	5
		高 I	2	4	2	3	3	3	2	2	1	2	3
		高 II	5	4	3	4	4	3	2	2	1	3	4
		高 III	4	4	3	2	4	3	3	3	2	3	3
事例 4828	項目変化得点	5	5	4	4	3	4	2	0	3	1	0	
	各 学 年 項 目 得 点	中 1	5	5	3	5	3	3	3	5	1	4	1
		中 2	3	4	1	3	2	3	5	5	1	3	1
		中 3	2	2	3	3	1	5	3	5	3	3	1
		高 I	5	3	1	5	1	4	3	5	1	3	1
		高 II	1	4	1	4	1	3	3	5	1	3	1
		高 III	3	5	2	5	2	4	3	5	2	3	1
事例 3213	項目変化得点	4	5	3	3	3	3	2	2	2	3	2	
	各 学 年 項 目 得 点	中 1	5	1	4	2	5	2	4	5	2	2	1
		中 2	2	2	3	2	3	2	4	5	1	3	2
		中 3	4	1	4	3	4	2	2	4	2	2	2
		高 I	2	2	2	4	3	3	3	4	2	2	1
		高 II	3	3	2	4	3	2	3	2	2	2	1
		高 III	3	2	2	3	3	4	3	2	2	4	1
事例 3221	項目変化得点	4	4	5	2	5	3	3	2	0	3	3	
	各 学 年 項 目 得 点	中 1	2	3	3	2	4	2	3	4	1	1	1
		中 2	4	2	4	3	3	3	4	3	1	1	1
		中 3	3	4	2	3	4	2	3	3	1	2	1
		高 I	2	3	3	3	3	3	3	3	1	3	4
		高 II	4	4	2	3	5	3	5	4	1	3	3
		高 III	4	4	3	2	4	3	5	4	1	2	2

仲間集団に対する同調的態度の変動が大きいことに特色がある。また、先輩とでも納得できるまで議論すべきだとか、家庭内で親子が対等であるべきだという態度は次第に弱まっている。一方女も政治に関与すべきだという態度はかなり一貫性が高い。

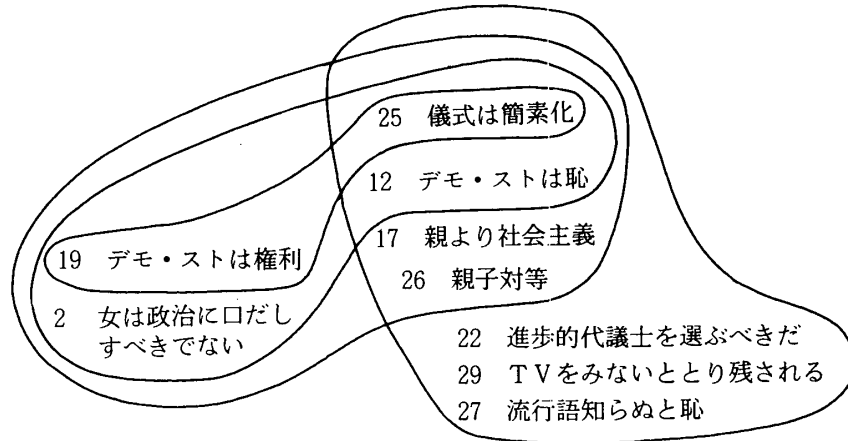
事例3221; デモ・ストを恥とする態度、権利とする態度および儀式を簡素化すべきだという態度で変動が大きい。デモ・ストを権利とみることと、恥とみなさないこととの間には学年ごとに対応がみられる。また女が政治に関与すべきか否かについては中3と高Iの間に態度の

断絶が伺われ、中学3年間では一貫して関与すべきだとの反応を示していたものが、高校に入って変化している。これと逆に、法律について考えるべきか否かについては、中学では変化しているが、高校に入って必要と認めないという方向で安定している。

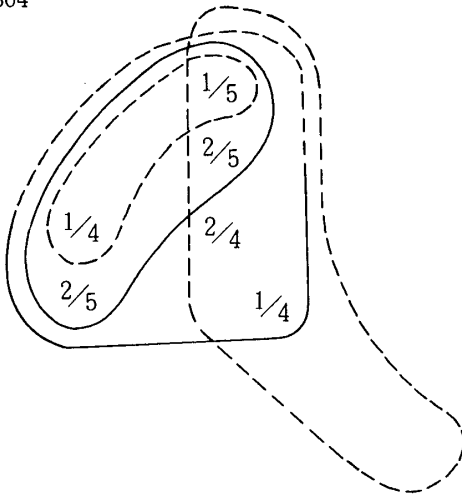
(c)女子における安定事例と不安定事例の比較

女子の安定群および不安定群から選択された諸事例の分析を通して明らかにされた事柄は以下のとおりであった。

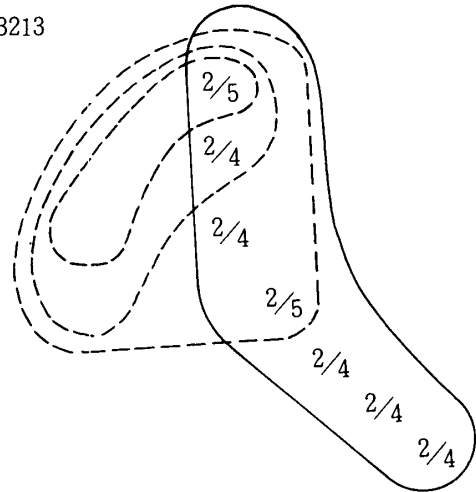
- 1) 事例間に共通して安定傾向の高い項目は安定事例



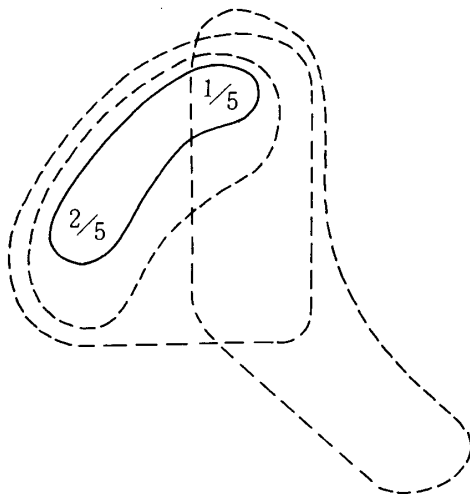
事例 4804



事例 3213



事例 4828



事例 3221

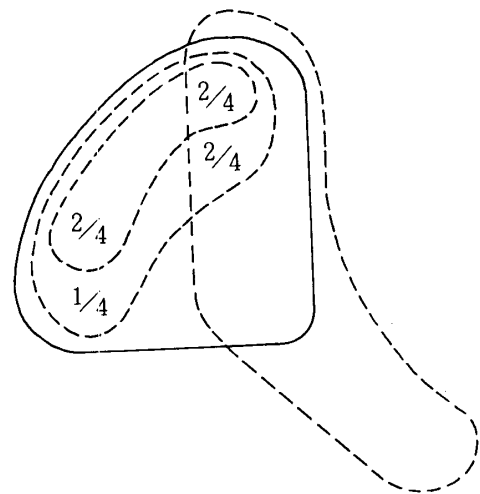


図 4 女子不安定 4 事例での不安定傾向の高い項目

では5, 8, 39であり, 不安定事例ではなかった。

2) 事例間に共通して不安定傾向の高い項目は安定事例では7, 34であり, 不安定事例では25であった。

IV 討 論

1 本研究で得られた結果の概要

本研究は, 中学1年から高校Ⅲ年までの6年間における中学生・高校生の社会的態度の縦断的データを分析したものである。中学生・高校生が1学年進んだとき, 社会的態度項目に対する彼らの反応が変わった程度を示す変化得点から分析を行ない, 被調査者をグループ化した。そして, 各グループの特徴やグループ間の違いを明らかにした。また, 各グループを構成する個人をとりあげ, 6年間の縦断的データに基づいて事例的に分析した。

ここで, 本研究で得られた結果についてまとめておく。

(1) 変化得点の全般的分析から

1) 分析対象者全員の変化得点の全般的分析

①男女ともに, 中1—中2, 中2—中3という学年間の変化得点は, それら以外の学年間の変化得点よりも高い。

②学年間の変化得点に関する性差は, 中1—中2という学年間以外の学年間に有意であり, 男子の変化得点が女子の変化得点よりも高い。

2) 各グループの変化得点の全般的分析

①男子の安定群および不安定群では, 両群ともに, 学年間の変化得点の間にはほとんど差はない。女子の安定群では, 高Ⅰ—高Ⅱという学年間の変化得点が他の学年間の変化得点よりも低く, 女子の不安定群では, 学年が進むにつれ, 学年間の変化得点が次第に減少する傾向にある。

②男女ともに, 安定群と不安定群との間では, どの学年間の変化得点にも有意差がみられ, いずれも安定群の変化得点が不安定群の変化得点よりも低い。

3) グループごとの男女間の比較

①男子の安定群は, 高Ⅰ—高Ⅱという学年間の変化得点で, 女子の安定群よりも高い。男子の不安定群は, 中2—中3という学年間の変化得点で, 女子の不安定群よりも高い。これら以外に, 学年間の変化得点に性差はみられない。

(2) 各グループの項目別分析から

1) 男子の安定群と不安定群

①安定群で項目変化得点の低い項目, すなわち項目に対する態度をほとんど変えない項目は, 保守的態度の1項目(5), 革新的態度の2項目(20, 21), 大衆社会的態度の2項目(30, 32)である。

②不安定群で項目変化得点の高い項目, すなわち項

目に対する態度を著しく変える項目は, 保守的態度の2項目(12, 13), 革新的態度の1項目(22), 大衆社会的態度の2項目(28, 31)である。

③安定群と不安定群の項目変化得点に有意差のあった項目は19項目あり, いずれの項目においても安定群の項目変化得点が不安定群の項目変化得点より低い。すなわち, これらの項目では, 安定群は不安定群よりも態度を変えないといえる。

2) 女子の安定群と不安定群

①安定群で項目変化得点の低い項目は, 保守的態度の2項目(5, 8), 革新的態度の2項目(17, 22), 大衆社会的態度の1項目(39)である。

②不安定群で項目変化得点の高い項目は, 保守的態度の1項目(12), 革新的態度の3項目(17, 19, 25), 大衆社会的態度の1項目(28)である。

③安定群と不安定群の項目変化得点に有意差のあった項目は19項目あり, いずれの項目でも安定群の項目変化得点が不安定群の項目変化得点よりも低い。すなわち, これらの項目では, 安定群は不安定群よりも態度を変えないといえる。なお, これら19項目のうち13項目は男子における結果と同様である。

3) グループごとの男女間の比較

①男子の安定群と女子の安定群の項目変化得点には, 革新的態度の1項目(17)以外に有意差はみられなかった。また, 男子の不安定群と女子の不安定群の項目変化得点には, 保守的態度および大衆社会的態度のそれぞれ1項目(13と29)以外に有意差はみられなかった。有意差のみられた項目では, いずれも男子の項目変化得点が女子の項目変化得点より高い。

(3) 事例分析から

1) 安定群, 不安定群それぞれのグループでの変化得点の高い項目, 低い項目で, 各事例の反応傾向をみると, そのうちのいくつかでは事例間に共通して安定(または不安定)の項目を見出すことができる。

2) 安定群の事例についてみると, 男子では5, 30, 20, 10の項目で事例間に共通して安定しており, 女子では5, 8, 39であった。また不安定な項目は男子では33, 女子では7, 34の各項目であった。

3) 不安定群の事例についてみると, 男子では16で共通して安定しており, 女子ではそのような項目はみられなかった。また共通して不安定な項目は男子では12, 28, 22, 24であり女子では25であった。

以上の分析結果から, 分析対象者全員では, 社会的態度が中学1年から高校Ⅲ年までの6年間に安定化していくこと, 男子よりも女子の方が社会的態度はより安定し

ていること、が明らかになった。これらは、われわれが既に報告した結果と一致するものである。また、本研究では、各グループについてみると、男女ともに、学年間の変化得点でも、項目水準からみた項目変化得点でも、安定群の方が不安定群よりも低く、安定群の社会的態度は安定していることが明らかになった。事例分析からみると、安定事例では各ケースが共通して安定した態度を示す項目、いわば安定群特有の特徴を示す項目があり、不安定事例では逆に各ケースが共通して不安定な態度を示す項目がある。

2 安定群と不安定群に関する討論

ここでは、安定群と不安定群の分析結果および事例分析の結果を中心に考察する。

本研究での分析結果によると、男女それぞれの安定群と不安定群の項目変化得点の間に有意差のみられた項目は、男女ともに19項目あり、そのうち13項目が男女それぞれの分析結果に共通するものである。これらの項目では、いずれも安定群の項目変化得点が不安定群の項目変化得点よりも低く、したがって、安定群の社会的態度が不安定群よりも安定しているといえよう。

さて、男女それぞれの分析結果に共通する13項目を中心にみると、これらは内容的にいくつかに分けて考えることができる。すなわち、デモヤストに関するもの、政治や法律に関するもの、家庭内の問題を中心とするもの、人間関係に関するものである。以下、順次これらについて述べるが、その際には、男子、女子それぞれの安定群と不安定群において、項目変化得点に有意差のみられた項目についても補足しておく。

まず、デモヤストに関する項目は、

12「デモヤストでさわぐのは民主国家の恥である」

19「デモヤストをするのは労働者の当然の権利である」

28「労働者や大学生のストライキやデモ活動などに関心がない」

という3項目である。このような項目、すなわちデモヤストに関する問題に対しては、男女とも安定群は早い時期からかなり明確な態度を形成しており、その態度を中学から高校までの6年間にあまり変えることがないといえよう。換言すれば、不安定群では安定群に比べ、デモヤストに関した問題に対する態度が、その時々で変わりやすいといえる。すなわち男子の不安定群では、項目12、28が項目変化得点の高い項目（表12）にあげられ、女子の不安定群では、項目12、19、28が項目変化得点の高い項目（表20）にあげられる。

また、これは不安定事例の分析からも明らかである。男子の不安定事例の2ケースでは、項目12、28に対して

6年間に態度が揺れ動いている。たとえば、事例3017の項目28における項目得点は、6年間に3、2、5、3、1、3（表24）となる。同様なことは、項目12、19、28に対する女子の不安定事例の4ケースについてもいえる。たとえば、事例4804の項目12における項目得点は、6年間に3、2、5、2、3、3（表24）となる。このように、項目に対する態度が「非常に賛成」（5点）、「非常に反対」（1点）、「賛成とも反対ともいえない」（3点）などに揺れ動いていることがわかる。

つぎにあげる項目は、政治や法律に関するものとしてまとめられる。

22「政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである」

30「国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない」

31「中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい」

また、これらの項目に補足して、男子では

36「ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどうだ」

という項目を、女子では、

1「国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい」という項目をあげることができる。このような政治や法律に関する問題に対して、安定群は不安定群に比べ安定した態度を形成している。すなわち、これらの項目のうち、項目30に対しては、男女の安定群ともに反対という態度で安定しており（表10、表22）、項目22に対しては、男女の安定群ともに「賛成とも反対ともいえない」という態度で安定している（男子については表15）。また、女子の安定群では、項目1に対して、反対という態度で安定している。

事例分析からみると、これらの項目のうち法律に関する項目30に対しては、男女の安定事例の全ケースとも中学から高校の6年間に項目得点は1点あるいは2点であり、反対という態度で安定している（表24）。

つぎに、家庭内の問題に関する項目は

17「社会のために正しいことであるなら親の反対をおし切っても行動すべきである」

21「男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない」

である。これらの項目の他に、男子では、

13「家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい」

23「家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである」

26「家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである」

という項目を補足できる。女子では、

6「長男が家をつぐのは当然だ」

という項目を補足できる。このような親との関係または大人と子どもとの関係、家庭内における男女の役割などの家庭内の問題に対して、安定群は不安定群に比べ安定した態度を形成している。これらの項目のうち、男子の安定群では、項目21（表14）、項目26には賛成という態度で安定している。女子の安定群では、項目17には「賛成とも反対ともいえない」という態度で安定している（表19）。

さらに、家庭内の問題、特に家庭内における人間関係にも関連するが、広く対人関係に関する項目は

5「世間をわたるには義理や人情が最も大切である」

8「目上の人にはもっと敬語を使った方がよい」

20「先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する」

という3項目である。これらの項目の他に、男子では、

16「いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごととは断った方がよい」

という項目を、女子では、

38「皆と同じような持物や服装をしていないとひげめを感じる」

という項目を補足できる。このような功利的な面を中心とした人間関係や対他比較を主とした人間関係などに関する態度では、安定群が不安定群よりもその態度をあまり変えることがないといえよう。これらの項目のうち、男女の安定群とも、項目20には賛成という態度で安定している（表9、表21）。また、男子の安定群では、項目16に対しては賛成という態度で安定しており、項目5に対しては「賛成とも反対ともいえない」という態度で安定している。

事例分析からみると、男子の安定事例における項目5、20、女子の安定事例における項目5、8は、男女それぞれの事例間に共通してみられる安定傾向の高い項目である。すなわち、各安定事例がこれらの項目に対する態度を、中学から高校までの6年間にほとんど態度を変えないといえよう。

以上みたように、デモヤストに関する問題、政治や法律に関する問題、家庭内の問題を中心とするもの、人間関係に関する問題では、安定群が不安定群に比べ安定した態度を形成しており、これらの面で安定群と不安定群の違いが特徴的に示されるといえよう。事例分析からみると、安定事例は特に人間関係に関する問題（男子では項目5、20、女子では項目5、8）に対してかなり安定した態度を示し、不安定事例は特にデモヤストに関する問題（男子では項目12、28）に対して不安定な態度を示

していることを指摘できる。このように、個々人の日常的経験の積み重ねを中心として形成されると考えられる人間関係に関する態度は、いったん形成されると、安定事例ではその態度がなかなか変化しない。これに対して、マス・コミなどを中心に持ち上げられ、それらの見方に影響されやすいと考えられるデモヤストへの態度は、不安定事例ではその時々に変化しやすい。

なお、態度の変動はその時々全く変化し、ある考え方に対して態度が定まっていなかった場合と、ある考え方に対して賛成から反対へ、あるいは反対から賛成へと、一定の方向に態度が変わる場合とがあることを指摘しておきたい。事例分析からみると、前者の場合が多いが、事例によっては後者の場合に当たるものもある。たとえば、女子の不安定事例の4804や3212である。事例4804では、

5「世間をわたるには義理や人情が最も大切である」という項目に対して、中学から高校までの6年間に、項目得点は4、4、3、2、2、2（表24）となり、賛成から反対へと態度が変わる。また、事例3213では、

17「社会のために正しいことであるなら親の反対をおし切っても行動すべきである」

という項目に対して、項目得点は2、2、3、4、4、3（表24）となり、反対から賛成へと一定の方向に態度が変わる。

さて、ここで男女ともに、安定群、不安定群、中間群の3群の項目変化得点に、有意差のみられなかった項目についてふれておこう。このような項目は14項目ある。これらの項目内容に注目すると、およそ3つに分けられる。すなわち、同調的な人間関係に関するもの、小市民的な幸福観に関するもの、伝統的・因襲的な価値観に関するもの、である。

9「学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである」

27「流行語などはよく知っていないとはずかしい」

29「みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする」

という3項目は、同調的な人間関係に関するものとしてまとめられよう。ここでは、身近なことで、友だちとの話題にのぼりやすい事柄が中心になる。

34「今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい」

37「いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない」

という2項目は、小市民的な幸福観に関するものとしてまとめられる。いわば「片隅の幸福」を求める態度である。

7「親孝行は子どもの義務である」

10「世の中の秩序を守るために上下関係はなくしてはな

らない」

11「日本は天皇を中心にまとまるべきである」

18「いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである」

24「『方角が悪い』などということはまったく信用しない」

という5項目は、伝統的・因襲的な価値観に関するものとしてまとめられよう。

3 データ分析の方法について

今回の報告では、分析対象者を態度項目得点の変化に基づいて、3つの基準から、男女それぞれ安定群、不安定群、中間群の3群に分け、相互の比較を行ってきた。これらの基準は、中学1年から高校Ⅲ年までの6年間に態度が変わらない項目をどのような項目とするかによって異なる。各基準の具体的内容は「Ⅱ 方法 3 分析方法」の欄に述べたが、ここで簡単に述べると、基準1は隣り合う学年の間で項目得点の差が0点あるいは1点の項目数に基づき、基準2は5段階評定尺度を3段階評定尺度に縮尺し、隣り合う学年の間で尺度値の差が0点の項目数に基づき、基準3は隣り合う学年の間で項目得点の差が0点の項目数に基づいている。そして、グループ間の比較は、隣り合った学年の間で項目得点の差が1以上の場合に変化得点を1点とし、①学年間の変化得点、②項目水準での項目変化得点、を算出して、それらの変化得点に基づいて行なった。事例分析はこれらのグループの特徴をよくあらわしていると考えられる数ケースをとりあげた。

データ分析の方法上、指摘できる問題点はいくつかあるように思われる。そのひとつはグループ分けの基準である。3つの基準がはたして妥当なものであったのか、あるいは3つの基準を用いることによって必要以上に各グループの人数が少なくなってしまうなかったかということである。たとえば、基準1によって態度が変動しない項目数の平均は、男子が170.09、女子が179.33となり、この項目数の理論的な上限値にあまりにも近くなっている。この項目数は、いずれの基準においても理論的には0～195（39項目×5学年間）である。したがって、安定群となる者は、男子ではこの平均値に $\frac{1}{2}$ SDを加えた181以上の項目数の者、女子では同様に186以上の項目数の者となる。また、男女それぞれ分析対象者が70名であるにもかかわらず、それぞれの安定群、不安定群は多くて13名、少ないのは8名であった。グループの人数が少ないことから分析結果への影響もあったことと思われる。

次にあげられる問題点は、変化得点に関するものであ

る。既に述べたように、変化得点は項目得点が変わったかどうかということから算出しており、その変化の大きさは考慮されていない。この点はグループ分けの基準にも関係する。データの分析に際しては、変化の大きさも考え合わせて行なう必要があったかもしれない。

事例分析では、項目変化得点の低い項目あるいは高い項目やグループ間の項目変化得点に有意差のみられた項目をとりあげたが、これらの項目以外に何らかの項目の意味に注目した方法が考えられるかもしれない。本報告では、安定群、不安定群の特徴を典型的に示していると思われるケースを取り上げたが、事例分析では、安定群、不安定群のなかから、保守的態度や革新的態度などの著しい者、ある特定の項目に注目して選択された者など典型的なケースを取り上げることもできよう。

また、このこととも関連するが、中学から高校の6年間に態度がほとんど変化しない安定群、態度が著しく変化する不安定群に分けての分析ではなく、特定の項目への反応に着目したグループ分けを行なった分析方法も考えられよう。

文 献

- 久世敏雄・速水敏彦 1974 中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅰ）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），21，1—11.
- 久世敏雄・速水敏彦 1975 中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅱ）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），22，13—24.
- 久世敏雄・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美・池田博和・伊藤義美・石黒敬子 1977 中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅲ）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），24，67—83.
- 久世敏雄・浅野敬子・伊藤義美・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美・池田博和 1978 中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅳ）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），25，119—129.
- 久世敏雄・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・池田博和・伊藤義美・浅野敬子 1979 中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（Ⅰ）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），26，17—35.
- 久世敏雄・後藤宗理・浅野敬子・宮沢秀次・二宮克美・池田博和・伊藤義美 1980 中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（Ⅱ）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），27，65—87.
- 久世敏雄・宮沢秀次・二宮克美・後藤宗理・浅野敬子・池田博和・伊藤義美 1981a 中学生・高校生の社会

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（V）

的態度に関する縦断的研究（Ⅲ） 名古屋大学教育
学部紀要（教育心理学科），28，99—149
久世敏雄・二宮克美・宮沢秀次・後藤宗理・浅野敬子・
池田博和・伊藤義美 1981b 中学生・高校生の社会

的態度に関する縦断的研究（Ⅳ） 名古屋大学教育
学部紀要（教育心理学科），28，151—170.
（1982年7月31日 受稿）

付表 1

この調査は社会や学校や家庭などに対するみなさんの考え方や態度について調べるものです。現代の中学生や高校生が一般的にどのような考え方をしているのかをみるのが目的ですから、思ったまま卒直に答えて下さい。

名古屋大学教育学部教育原論研究室
発達心理学研究室

[中学・高校] [男・女] (あてはまる方を○で囲んで下さい)

_____年 _____組 _____番

調 査 A

1 (やり方)

次の39のそれぞれの考え方や態度について、あなたが実際にどう考えているかを 1非常に賛成 2賛成 3賛成とも反対ともいえない 4反対 5非常に反対 のうちから1つ選んで○印をつけて下さい。

	非 常 に 賛 成	賛 成	な い と も い え な い	賛 成 と も 反 対 と も い え な い	反 対	非 常 に 反 対
(1) 国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい	(1)					
(2) 個人の自由は尊重すべきである	(2)					
(3) 流行語などはよく知っていないとはずかしい	(3)					
(4) 女が政治などに口だしすべきでない	(4)					
(5) 正しいことであれば世間体など気にすべきでない	(5)					
(6) 労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない	(6)					
(7) 結婚は家柄を重んじなければならない	(7)					
(8) いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごとは断った方がよい	(8)					
(9) みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする	(9)					
(10) 伝統や習慣は尊重すべきである	(10)					
(11) 社会のために正しいことであるなら親の反対をおし切っても行動すべきである	(11)					

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究 (V)

	非常 に賛 成	賛 成	な い と も い え な い	賛 成 と も い え な い	反 対	非常 に反 対	
(12) 国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない	(12)	-----	1	2	3	4	5
(13) 世間をわたるには義理や人情が最も大切である	(13)	-----	1	2	3	4	5
(14) いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである	(14)	-----	1	2	3	4	5
(15) 中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい	(15)	-----	1	2	3	4	5
(16) 長男が家をつぐのは当然だ	(16)	-----	1	2	3	4	5
(17) デモやストをするのは労働者の当然の権利である	(17)	-----	1	2	3	4	5
(18) 理論よりフィーリングやムードが大切である	(18)	-----	1	2	3	4	5
(19) 親孝行は子どもの義務である	(19)	-----	1	2	3	4	5
(20) 先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する	(20)	-----	1	2	3	4	5
(21) 誰が衆議員の選挙で当選しようとする日本の政治はかわらないと思う	(21)	-----	1	2	3	4	5
(22) 目上の人にはもっと敬語を使った方がよい	(22)	-----	1	2	3	4	5
(23) 男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない	(23)	-----	1	2	3	4	5
(24) 今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい	(24)	-----	1	2	3	4	5
(25) 学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである	(25)	-----	1	2	3	4	5
(26) 政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである	(26)	-----	1	2	3	4	5
(27) 共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする	(27)	-----	1	2	3	4	5
(28) 世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない	(28)	-----	1	2	3	4	5
(29) 家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである	(29)	-----	1	2	3	4	5
(30) ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどろだ	(30)	-----	1	2	3	4	5
(31) 日本は天皇を中心にまとまるべきである	(31)	-----	1	2	3	4	5

非常に賛成 賛成 ないともいえ 賛成とも反対 反対 非常に反対

- (32) 「方角が悪い」などということはまったく信用しない (32) |-----|
1 2 3 4 5
- (33) いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない (33) |-----|
1 2 3 4 5
- (34) デモやストでさわぐのは民主国家の恥である (34) |-----|
1 2 3 4 5
- (35) 結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい (35) |-----|
1 2 3 4 5
- (36) 皆と同じような持物や服装をしていないとひきめを感じる (36) |-----|
1 2 3 4 5
- (37) 家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい (37) |-----|
1 2 3 4 5
- (38) 家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである (38) |-----|
1 2 3 4 5
- (39) 公害問題は被害者と加害者だけの問題である (39) |-----|
1 2 3 4 5

A LONGITUDINAL STUDY OF SOCIAL ATTITUDES OF ADOLESCENTS (V)

Toshio KUZE, Shuji MIYAZAWA, Keiko ASANO, Motomichi GOTO, Katsumi NINOMIYA,
Hirokazu IKEDA, and Yoshimi ITO

The purpose of the present study is to examine, on the basis of the longitudinal data, how the social attitudes of students develop through the secondary and high school ages. This report examines specifically the stability of social attitudes by using three different designs of analyses: (a) to describe the stability of social attitudes over 6 years, (b) to compare the changing processes among subgroups classified on the basis of total level of attitudinal stability, and (c) to examine the individual stability in attitudes by focusing upon particular subjects who represent Stable and Nonstable groups.

The social attitudes, in the present study, were defined in terms of three scales: conservative, radical, and mass-social. Each scale contains 13 items. The subjects consisted of 70 boys and 70 girls in upper and lower secondary school affiliated to the Faculty of Education of Nagoya University. Longitudinal data were collected over six years by monitoring the same groups of students once a year, as they proceeded from the first grade to the sixth grade through the secondary and high school education. Subjects started the school in different years (in 1972, 1973, and 1974) and graduated 6 years later (in 1977, 1978, and 1979, respectively), but they are combined into a single group for the purpose of the stability analysis.

Results of analysis are summarized as follows:

- (1) Year-by-year stability of social attitudes become higher with increasing ages.
- (2) When subjects of each sex are divided into three subgroups (Stable, Middle, and Nonstable), based on the total stability score summed over the periods and items, significant group differences are found in 13 items for both sexes.
- (3) Examination of individual cases indicates that stable and nonstable subjects are also best characterized by some of the typical stable and nonstable items.